

國學院大學學術情報リポジトリ

大場磐雄「神道考古学」の構想と「祭祀遺跡」概念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 耕作 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002050

大場磐雄「神道考古学」の構想と「祭祀遺跡」概念

中 村 耕 作

要旨

大場磐雄の「神道考古学」の特徴とその形成過程を整理し、今日的課題を検討する。まず、大場の研究を4段階に区分した上で、「神道考古学」「祭祀遺跡」の枠組み・分類案の変遷を整理し、当初の多様なテーマを含んだ「神道考古学」が、戦後「祭祀遺跡研究」に収斂していったことを確認した。戦前の大場による関連論文では、石器時代の宗教遺物、石製模造品出土遺跡の検討、神社宝物の調査研究、自然物を対象とした祭祀遺跡、祭祀遺物、古墳・古氏族の研究、神話・古典の考古学的研究といった多様なテーマが論じられていた。最後に、大場の「祭祀遺跡」研究における遡及法の問題、祭祀専用空間論、自然景観認識の問題を取り上げ、その特徴とその今日的課題を論じた。

キーワード

神道考古学、祭祀考古学、祭祀遺跡、祭祀の対象

1. 「神道考古学」の諸段階

大場磐雄が提唱した「神道考古学」は、杉山林継の提唱した「祭祀考古学」に継承され、國學院大學伝統文化リサーチセンターにおいて、その枠組み・方法論の再検討が行われてきた。

しかし、そもそも大場の「神道考古学」とはいかなる性格のものだったのだろうか。「神道考古学」は、「神道考古学の提唱と其の組織」(1935a)で提唱され、続々と発表された諸論考は『神道考古学論攷』(1943b)にまとめられた。その後、1948年に「祭祀考古学の研究」で学位取得、その内容を個別に公表しながら、「神道考古学の体系」(1964、以下「体系」)、「歴史考古学上の祭祀遺蹟」(1965a)で体系が公表された。その後、古稀記念論文集『祭祀遺蹟－神道考古学の基礎的研究－』(1970)で学位論文が公表されるとともに、1972年からは大場が責任編集となって『神道考古学講座』全6巻が刊行された。但し、その1巻冒頭に掲げられるべき新たな総論「神道考古学の意義・内容分類」は大場の死去により実現せず、「体系」の再録となった。

以上が、神道考古学の提唱から体系化に至る動向である。もちろん、これ以前に『神社と考古学』で「神社考古学」を提唱し(宮地 1926-28)、「原始神道の考古学的考察」(1930-31)などを著し、大場の没後にはもう1つの論文集『考古学上より見た古氏族の研究』(1975)も刊行されているが、「神道考古

学」の代表的著作としては「体系」や『祭祀遺蹟』が挙げられることが多い。

しかし、大場の長い研究の中で、「神道考古学」も終始一貫していたわけではない。筆者は先到大場の研究の推移を4段階に区分したが(中村 2008・2010)、改めて本稿の目的に沿って略述しておく。

第1段階：石器時代研究の一環としての宗教思想研究(土偶論・石棒論など)や、民俗学的な研究の段階。

第2段階：1926年の「神社と考古学」の発表や三倉山との出会い以降、神社局に移り職務として神社調査を行う傍ら、精力的な祭祀遺跡の調査をはじめた段階。石製模造品や手捏土器などの年代が判明する特徴的遺物の出土例を重視していた。

第3段階：1935年の「神道考古学の提唱と其の組織」から、学位論文「祭祀遺蹟の研究」を経て、1964年の「神道考古学の体系」に至る段階。特徴的な自然景観を対象とする祭祀遺跡の文献・民俗事例・考古資料の3種の資料からの考察を研究方法の中心としたもので、『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』に主要な成果が収録された。

第4段階：第3段階後半から最晩年の『考古学上から見た古氏族の研究』に至る時期で、祭祀遺跡と古氏族の関係などの祭祀遺跡の歴史的脈絡の検討や歴史時代の祭祀、信仰対象の不明瞭な集落内祭祀など、第3段階とは異なった資料の検討を行っ

た段階。

このうち、第1段階・第2段階の動向や、第3・4段階の視点の相違については既に検討しており(中村2008・2009・2010)、第3段階における神職講習会についても別稿で検討した(中村2011)。

本稿では、まず「神道考古学」の枠組みの変遷を確認した後、第3段階の動向をやや詳細に整理することで、大場の神道考古学の背景・性格を検討していきたい。

2. 「神道考古学」の枠組みの変遷

『神社と考古学』

『考古学講座』の一編として、宮地直一の名で執筆されたもので、当初分載され、後に一書にまとめられた(宮地 1926-28)。その目次は別掲のとおりである[資料1]。本書は、神祇史の歴史的研究の一環として、考古学的研究の重要性を説き、神社信仰との関係を追及するため先史・有史の全般を対象としている。柴田常恵(1924)や後藤守一(1927)によって「祭祀趾」の用語が使用されつつあった当時、現存する神社を考古学に応用する視点を持った本書は、祭祀遺跡研究の先駆的研究の一角を占めていた。後の大場の研究と比較すると葬送儀礼への言及や宗教学的理論の応用という独自の特徴を持つ一方、文献や民俗事例の記述の豊富さなどは後に続く特徴である(中村 2009)。古墳時代関係の記述は第3章口の宗教的遺物の項である。ここでは土器・剣・鏡および模造品について説明があるが、前3者は古典を参照して宗教性を述べるものであり、後者は種類を列挙するに留まっていて、いわゆる「祭祀遺跡」については殆ど触れられていない。

「原始神道の考古学的考察」

1927年の洗田遺跡の調査、翌年の三輪山中の巨石群調査などを経て、『神道講座』に「原始神道の考古学的考察」(1930-31)を発表する。第2段階の総括と評価できる内容で、先史時代と原史時代に大別して関係する考古資料を概説する。先史時代については『神社と考古学』と概ね同様の構成である。

原史時代については、「1 遺跡 一祭祀趾、二祭祀関係遺跡 2 遺物 一祭祀遺物、二祭祀関係遺物」とし、祭祀趾の項では祭祀遺物(模造品・手捏土器など)が出土した場所を「祭祀趾」として列挙

した上で、これらに共通する3つの特徴(封土のないこと、特殊設備の存在、神社との関係)を挙げる。祭祀関係遺跡の項では1子持勾玉出土地、2土製動物出土地、3古墳附属の祭祀関係遺跡、4磐境・磯城・神奈備の類、5其他の祭祀関係遺跡の5類型を示す。

一方、祭祀遺物の項では、石製模造品、土製模造品(手捏土器を含む)、其他に区分し、それぞれの器種を挙げた後、関連する古典の記述を紹介する。

最後に、祭・政・葬が相関関係にあったことを指摘し、一定の地域を画して祭壇設備を整え、石製・土製の仮器を枝に懸け、神饌を供して奉斎したものと当時の祭祀を復元している。

「神道考古学の提唱と其の組織」・「神道考古学の組織」

「神道考古学の提唱と其の組織(一)」は『神社協会雑誌』に発表された(1935a)。提唱の理由・意義については『神社と考古学』とほぼ同様だが、「神道考古学」は「過去の物質的資料に拠り、本邦古来の神道を背景とする諸現象を考究するの學」と定義される。1932年に3歳下の山内清男による「日本遠古之文化」、33年に4歳下の森本六爾による『日本原始農耕』、36年に師である柴田常恵の「仏教考古学概説」を含む『仏教考古学講座』が発表された頃である。

組織については引き続いて「(二)」として、発表予定だったが、さらに再検討を加えて翌年、『皇国時報』に「神道考古学の組織」として発表された(1936)。その分類は別掲のとおりである[資料2]。

結果として両稿は、理論的な枠組みを示したのみで具体的な資料、特に考古資料は取り扱われていない。神社の祭神との関係の強弱によって分ける視点は、『神社と考古学』で示された分類に近く、祭祀遺跡研究というよりも、神社宝物研究に寄ったものとなっている。ここで示された分類は、神職を対象とした講習会などで講義されているものの、先史・原史の考古資料に適用された例はない(中村 2011)。

学位論文「祭祀遺跡の研究」

1947年に提出され、翌年学位を受けたものである。この時点では「神道考古学」そのものの体系として示されたものではないが、後に「神道考古学の体系」として示された内容はこのダイジェストであり、分類などはほぼ同様である。本論文で対象とされたの

資料1 『神社と考古学』目次 (宮地 1926)

- 第一章 神社考古学について
- 第二章 神社考古学の範囲
- 第三章 原始信仰期
 - イ 石器時代の宗教的遺物 (土偶と土版、動物土偶、石棒、其他の遺品)
 - ロ 原史時代の宗教思想 (墳墓の変遷、宗教的遺物、石崇拜、樹木崇拜)
 - ハ 神社の発生 (墳墓、神籬、社殿の発生)
 - ニ 神事その他に現はれた考古学的遺物

第四章 有史期 (外来思想混淆期)

- イ 神像 ロ 神饌 ハ 調度及装飾 ニ 建築
- ホ 棟札 ヘ 其他 ト 鰐口 チ 制札
- リ 額と絵馬 ヌ 燈籠

※神社の諸器物を神社との関係の濃淡で、第一類 (神籬、磐境、社殿、神像など)、第二類 (棟札、制札の類)、第三類 (梵鐘、懸仏、鰐口、太刀など)、第四類 (墓誌、銅剣銅矛、各種発掘品など) に区分

資料2 「神道考古学の組織」による研究対象の分類 (大場 1935)

- | | |
|---|--|
| 第一篇 神霊並びにその奉斎に関するもの
第一 御神霊・御霊代等神霊憑依の物体 (山岳・樹木・巖石・池沼等、鏡・剣・玉等、神像・神符・守札等)
第二 神霊奉斎の設備 (磯城・神籬・磐境・神奈備・三室等、社殿、神輿・厨子等)
第三 殿内の装飾・調度品等 | 第二篇 祭祀篇
第一 祭祀関係 (祭祀遺跡遺物、幣物・祭器、神饌等)
第二 祀官関係 (服装・持物等)
第三篇 崇敬篇 |
|---|--|

資料3 「祭祀遺蹟に就いて」による祭祀遺跡の分類 (大場 1943)

狭義の祭祀址 (その場で祭祀が行われたもの)

- イ: 何等の標的を明かに知り得るもの
- ロ: 古社の境内又は附近に存するもの
- ハ: 神社と縁故を有するか、信仰民俗等を伝ふるもの
- ニ: 単に一括して祭祀遺物を出土する所 (イ〜ロの要素が失われたものと想定)

「祭祀関係遺蹟」

- イ: 銅鈴・銅剣及び銅鐸等の出土地の一部
- ロ: 子持勾玉出土地
- ハ: 土製馬形その他の出土地
- ニ: 其他特殊な例

資料4 学位論文「祭祀遺蹟の研究」における祭祀遺跡・祭祀遺物の分類 (1947 年提出)

祭祀遺蹟

- (1) 自然物を対象とするもの (60頁)
 - イ 山嶽 ロ 巖石 ハ 島嶼 ニ 湖沼・池泉
- (2) 古社の境内ならびに関係地 (2頁)
- (3) 住居付属地 (2頁)
- (4) 古墳付属地 (3頁)
- (5) 単独遺物発見地 (3頁)

祭祀関係遺蹟

- (1) 銅鈴・銅剣・銅鐸等の出土地 (4頁)
- (2) 子持勾玉の出土地 (3頁)
- (3) 土場類の発見地 (3頁)

祭祀遺物

- イ 土器 (7頁) 一 土師器 二 須恵器 三 祭祀用小形土器
- ロ 土製模造品 (6頁) 一 鏡円板 二 勾玉・丸玉・管玉・棗玉 三 匙形品・齒車形品 四 白・杵・柄杓・案・箕・有溝円盤 五 小形魚類
- ハ 滑石製模造品 (16頁) 一 白玉・勾玉・管玉等 二 劍形品 三 有孔円板品・不整板形品類 四 紡錘車・刀子・その他 五 馬形・人形・船形
- ニ 金属製品 (2頁) 一 鑑鏡 二 鉄器類

祭祀関係遺蹟発見品

- ヘ 土馬 (4頁)
- ホ 子持勾玉 (3頁)
- ※青銅器は省略

資料5 日本考古学辞典「祭祀遺蹟」における祭祀遺跡・祭祀遺物の分類 (大場 1962b)

祭祀遺蹟

- 1 自然物を対象とするもの (イ) 山嶽 (ロ) 巖石 (ハ) 樹木 (ニ) 海島 (ホ) 湖沼・池泉 (ヘ) その他
- 2 古社の境内ならびに関係地にあるもの
- 3 古墳に付属するもの
- 4 住居集落付属のもの
- 5 子持勾玉発見地
- 6 土馬発見地
- 7 祭祀関係品単独出土地
- 8 その他

祭祀遺物

- 1 土器 土師器・須恵器
- 2 土製模造品 小形粗造土器・鏡・円板・勾玉・丸玉・管玉・棗玉・白・杵・匏・柄杓・案・箕・馬形・魚形・菓子・不明品
- 3 滑石製模造品 有孔円板・劍形品・白玉・勾玉・管玉・紡錘車・刀子・馬形・人形・船形・子持勾玉
- 4 金属製品 儀鏡・鉄鈴・鉄鎌・刀子
- 5 各種古墳副葬品 (特殊例)

資料6 「神道考古学の体系」における祭祀遺跡・祭祀遺物の分類（大場 1964）

祭祀遺跡

A 遺跡を主とするもの（祭祀の対象の明らかなもの）

1 自然物を対象とする遺跡

山 岳 浅間型（富士型）…高山や火山のように遠方から畏怖崇敬するもの
神南備型（三輪型）…集落に接近し、親愛の念をこめてまつるもの

巖 石

石神 立石型…高く聳立するもの
飯石型…盤居するもの

磐座 要石型…小形の自然石を対象とするもの
像石型…一種の紋理や特別な形状を有するもの

樹 木（湛木型）…（神木に対するもの）

水 霊 鏡ヶ池型…鏡を投入するもの

養老型…延命長寿の信仰をもつ池泉・温泉

沖津宮型…海中の島嶼（航海安全を祈願）

三嶋型…群島への信仰（伊豆諸島など）

2 古社の境内及び関係地

3 墳 墓

4 住居跡

B 遺物を主とするもの（祭祀の対象の不明なもの）

1 祭祀遺物の単独発見地

2 子持勾玉発見地

3 土馬発見地

C 遺物の発見されないもの

主要祭祀遺物

一、石製品（滑石製模造品、子持勾玉）

二、土製品（粗造小形土器、土製模造品、土馬）

三、金属製品（銅鏡、鉄器、鉄製模造品）

資料7 「歴史考古学上における祭祀遺跡」での祭祀遺跡の分類（大場 1965）

I 神道前期

A 配石遺構 1 環状列石 2 石積 3 立石 4 列石
5 組石棺 6 敷石 7 鮭石

B 信仰遺物発見地 1 土偶発見地 2 石棒発見地
3 その他

C 住居付属遺構 1 貝塚 2 墓地 3 その他

II 原始神道期

A 祭祀対象の判明するもの 1 自然物を対象とするもの 2 古社の境内ならびに関係地 3 墳墓に付属するもの 4 住居に付属するもの

B 祭祀遺物発見地 1 祭祀遺物類の単独発見地

2 子持勾玉発見地

C 遺物の存在不明遺蹟 1 文献から立証できるもの
2 民俗から立証できるもの

III 文化神道期

A 前代継承の遺跡 1 自然物対象 2 土馬発見地

B 仏教習合の遺跡 1 神宮寺・別当寺跡 2 修法遺跡 3 経塚 4 塚

C その他

は原史時代の祭祀遺蹟であり、別掲の分類にしたがって詳述された[資料4]。()内は内容量であり、「自然物を対象とするもの」が大半を占めることがわかる。ここでは、山・石などのランドマークを祭祀対象とする事例を、古典の記述、現存の神社信仰・民俗事例をそれぞれ掲げて各種の類型を示した後、それぞれに該当する祭祀遺物出土例を紹介している。

祭祀遺物については、まず土器を挙げるが、具体的な記述は小形土器、各種模造品にほぼ限定される。

『日本考古学辞典』

編集委員として、神道考古学関係、学史関係の用語を中心に40近い項目を執筆している。このうち、「神道考古学」(1962c)の項目では、「わが国固有の宗教である神道を中心とする諸現象を、考古学的資料から考察し、一部門を樹立したもので、広い意味での宗教考古学に属し、仏教考古学と並立するもの」と定義しており、対象として祭祀跡・祭器類が示され、自然物崇拝の実際を立証することが研究目的の例として挙げられている。

「祭祀遺跡」(1962b)の項目では、祭祀遺跡の認

定を「標的物と祭祀に使用した器具類の発見によるものの中にはその一方のみの場合もある」とした上で、8項目に分ける[資料5]。このうち1の自然物を対象とするもののみイ〜ヘに細分されている。また、1と2の複合や2と4の併存、7が調査の結果1や2に変更されることがあると明示されている点は注目しておきたい。

「神道考古学の体系」

國學院大學創立80周年記念の國學院大學紀要の特集号に掲載された(1964)。内容は学位論文のダイジェストであるが、神道考古学が「神道に関する諸現象を考古学的に考究するの学」と改めて定義されたこと、「1 神道前期」「2 原始神道期」「3 文化神道期」の時期区分が示されたことは本稿が初出である。この部分において、「神道考古学の組織」における分類が「神社を中心とする諸種の有形物を包括する」ものであったのに対し、現状では美術史や建築史に譲るものもあるとして埋蔵文化財を対象とするものに改めたことが明記されている。

祭祀遺跡を「神祭りを専門に行った跡」であり

「古墳や住居跡・工作跡等と並び日本考古学上の一部門を占める」と規定するが、祭祀遺跡の中に墳墓や住居跡が加わっている点については特に注釈は無い。原始神道期の祭祀遺跡・祭祀遺物の分類は別掲〔資料6〕の通りであり、概ね学位論文と変わらない。考古学辞典の分類とは異なるので、学位論文を直接参照して書かれたものと思われる。新たにA1のイ～ニの細分に浅間型・神南備型・立石型・飯石型・要石型・像石型・鏡ヶ池型・養老型・沖津宮型・三嶋型という細別型式名が示された。

「歴史考古学上における祭祀遺蹟」

「体系」の翌年に発表されたもの(1965a)。神道前期や歴史神道期の祭祀遺跡については、「体系」においても言及されていたが、本稿において体系的分類として明示された〔資料7〕。神道前期では配石遺構が重視され、文化神道期では原始神道期の様相を引き継ぐものと、仏教習合の遺跡が類型化された。ここにおいて、大場の「神道考古学」における祭祀遺跡の分類の大綱が固まったことになる。

枠組みの変化と課題

以上、大場の「神道考古学」あるいは祭祀遺跡の枠組みを明示した論考を概観してきた。ここでまず問題となるのは、「神道考古学」の枠組みと「祭祀遺跡の分類」は本来的には同じではないという点である。「神道考古学」とは、各種の定義で示されたように、神道に関する考古学的研究全般を言うのであって、祭祀遺跡研究は本来その一部に過ぎなかったはずである。当初「神道考古学の組織」で示された分類は、神社資料全般を対象としたもの祭祀遺跡・祭祀遺物を直接の対象としたものではない。にもかかわらず、「神道考古学の体系」の公表によって、〈神道考古学≡祭祀遺跡・祭祀遺物〉の研究と認識されることとなった。

次に祭祀遺跡の認定方法の変化を確認しておきたい。「原始神道の考古学的考察」では、祭祀遺物が出土した場所を祭祀遺跡として挙げた上で、その内容・特徴が議論されていた。その背景には、正体不明の巨石や神籠石を「神代の遺跡」などとして喧伝する風潮があり、これに対抗して、時期が判明する遺物の伴出を重視したものと思われる(中村 2009)

ところが、学位論文では山や石などのランドスケープについて、古典や現存する神社信仰や民俗事例を

重視して類型を設定した後で、祭祀遺物出土例を紹介するという手順に変化している。また、この手法により、大場の研究はもちろん、現在に至るまで祭祀遺跡研究において「祭祀の対象」という概念が重視されることになる。

では、こうした考え方はどのように形成されてきたのであろうか。次に、この間の研究動向と背景をやや詳しく見ていくことにしたい。

3. 神道考古学の多様な広がり収斂

1943年までに刊行された関係論文22編は『神道考古学論攷』(以下『論攷』と略)に収録されているが、その巻末に、同書未収録のものを合せて関係論文として大場自身の著書5編⁽¹⁾、論文・報告等42編が挙げられている⁽²⁾。大場はそれまでに論文だけで100編以上を著しており、この抽出されたリストは当時の大場の抱いていた「神道考古学」の範囲・テーマを知る上で格好の素材である。そこには、後の学位論文や『祭祀遺蹟』に収録されたものを凌ぐ幅広いテーマが看取される。以下ではまず、このリストを手がかりに、戦前に構想された「神道考古学」の広がりについて、各論考の主題・方法論とその関連調査を瞥見していき、最後に、祭祀遺跡研究に収斂していく過程を確認していきたい。

(1) 石器時代関係の著作(主に第1段階)

先史時代関係の著作は第1段階に集中しているため本稿では詳しく扱わないが、『論攷』巻末リストには「石器時代宗教思想の一端」(谷川 1922)・「土偶に関する二三の考察」(1926)・「神奈川県中郡大根村の石器時代遺跡調査」(1927a)の3編のみが挙げられている。このうち大根村の報告は、石に伴って出土した土偶の考察を主体としたものである。しかし、この時期の宗教思想・信仰関係の論考は『神社と考古学』を除いても、石棒や石冠に関する論考など8編を数える。これらの多くは、社会学・人類学・宗教学などの外来理論を応用すること、土偶・石棒などを文化論の一部として論じること、民族誌事例を直接的に適用することなどの特徴がある。こうした中で『論攷』に収録された土偶に関する2編は具体的な考古学的観察・考察を行ったものである(中村 2008)。

（２）模造品・手捏土器出土遺跡の考察（主に第２段階）

「南豆に於ける特殊遺跡の研究」（谷川 1927b）、「上代祭祀跡とその遺物に就いて」（1930b）、「原始神道の考古学的考察」（1930-31）などが第２段階の代表的著作である。これらについては前述のように、模造品や手捏土器の出土例を列举して特徴を抽出すること、「磐座」などについても、年代が明らかな遺物の存在を重視することなどが特徴として挙げられる（中村 2009）。

（３）神社資料の調査研究

神社誌・宝物誌の編纂

大場は1925年に内務省嘱託として、神社局考証課において職務として神社調査を行っている。その具体的内容の詳細は不明だが、その職務の延長線上に宮地直一・柴田常恵らの指導を得て、各種神社誌・神社宝物誌の編纂を行っている。公刊されたものを挙げると、『石上神宮宝物誌』（1930）、『羽黒山古鏡図譜』（1934）、『箱根神社大系』（1935）、『官幣中社坐摩神社誌』（1936）、『神部・浅間・大歳御祖神社誌』（1937）、『官幣大社鹿島神宮宝物図鑑』（1939）、『国幣小社伊豆山神社誌』（1939）、『神宮徴古館陳列品目録』（1940）、『官幣大社香取神宮宝物誌』（1940）、『伊古奈比咩命神社』（1943）、『三河国一宮砥鹿神社』（1944）および戦後刊行された「伊那下神社」（大場 1965b）などである。このほかにも『楽石雑筆』を紐解くと寒川神社、三島大社、安房神社などで宝物館の調査を行っているが、その一部は『神社協会雑誌』に連載された「官国幣社宝物物語」（1936-37）にも著されている。この多くは今日的には美術史や建築史、文化財学などの領域であるが、当時の広義の「考古学」のあり方においては、歴史考古学の分野に属するものであった。なお、このほか、「小野神社蔵鉄鐸」（1933）、「大国魂神社の史料及び社宝に就いて」（1942d）の著作もある。

神社境内の遺跡調査報告

『論攷』巻末リストには神社の由緒に直接関わる宝物調査のほか、神社境内の遺跡や出土遺物の報告も掲げられている。「考古学上より見たる蕨田神社」（谷川 1926a）は、武蔵国荏原郡の式内社である蕨田神社の論社について、考古資料の分布から蒲田八

幡宮附近であることを論じようとしたものだが、結論は未刊である。「長田神社境内出土の遺物に就いて」（谷川 1926c）は神戸市長田神社境内から出土した弥生土器・石器・古瓦について報告したもの、「官幣大社日吉神社境内発見古墳調査報告」（1929b）は内務省に提出された未刊のもので内容は不明である。「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告」（1932）は千葉県館山市の安房神社洞窟として知られる人骨出土遺跡の報告である。

神社宝物調査・保存の普及活動

大場は神社・宝物調査にとどまらず、宝物殿の整理・陳列指導も行っている。神宮徴古館の資料整理は1938年からは毎月半分を伊勢で過ごすという重要な任務であったが、そのほかにも、三島大社（1922年）や安房神社（1944年）の宝物殿の整理・指導も行っている。

こうした実地調査のほか、大場は1929年に愛知県神職会（1929a）、1937年に神奈川県・岐阜県・埼玉県各神職会、1941年には神祇院主催の神職講習会で講演を行っている。これらは「神社と考古学」「神道考古学」の題で行われたものであり、神社そのものを「郷土博物館」と位置づけ、その意義を説いている。地方においては、地元の話題を取り入れることなどもあるが、いずれも『神社と考古学』以来の神社宝物の意義と取り扱いについての内容を骨子とする。また、1941年と42年の神祇院主催講習会では「神社宝物の取扱いについて」の題で講演を行ったが、これはこの時期に神祇院が実施した「神社宝物及び貴重品管理」に関する調査に基づくものである（中村 2011）。

（４）自然物を対象とした遺跡の研究

個々の要素の考察

第３段階の特徴である、特定の自然景観への注目は具体的考古資料を伴わない記述であれば『神社と考古学』まで遡り、1927年の洗田遺跡の調査でも三倉山に注目している。そもそも、神社の原初形態が自然物崇拝であったことは、既に神祇史や宗教史の分野では定説化していた。

大場が具体的な資料を扱った論文構成の上で山や石・池などを前面に押し出すのは1935年以降である。この年、「神道考古学の提唱と其の組織」に引き続

いて「池中の鏡」「峠神の一考察」「赤城山神蹟考」が立て続けに発表され(1935b～d)、さらに「日本上代の巨石崇拜」(1937d)、「磐座・磐境等の考古学的考察」(1942c)、「沼尾池跡と発見遺物」(1943a)などが続く。これらの内容はその後も繰り返し論じられたものであり、ここでは詳しい紹介はしないが、いずれも池・峠・山・石・沼などの自然景観を対象に、文献や現存神社・民俗の例を挙げた上で、祭祀遺物の出土している遺跡をそうした信仰に関わるものと推察する構成である。

精神科学研究助成奨励金による現地踏査

提唱直後からの相次ぐ論考の背景には、昭和8年度から9年度の2期にわたり、文部省の精神科学研究助成奨励金を受けて行った「原始神道の考古学的研究」による現地踏査があった。その重要性は既に茂木雅博(1981)の指摘があるが、國學院大學に寄贈された大場の研究資料には両年度の書類控が残されており、その実態を知ることができる(國學院大學伝統文化リサーチセンター編2011:C-62-2・3)。この中に含まれていた1934度の交付を伝える新聞記事によれば、1929年以降に文部省が日本・東洋の精神文化に関する研究に奨励金を補助しており、34年度は国立大学、高等師範学校、高等学校、私立大学など62の機関に属する研究者に交付されたという。大場には8年度に490円、9年度は400円が交付され、図書購入、カード印刷、助手手当支給のほか大部分は現地調査旅費に使われた。8年度の調査地は、長野県諏訪大社周辺、同雨境峠、千葉県香取神宮、九州方面(宇佐大元山、高千穂、宮崎徴古館など)、千葉県東長田遺跡、群馬県榛名神社湖納鏡、同貫前神社・上毛三碑、九年度は栃木県二荒山神社、九州・山陰・山陽方面(福岡県宗像大社・佐賀県神奈備山・島根県八重垣神社鏡池・栢縫神奈備山・岡山県宮座山・兵庫県六甲山など)、奈良県下神奈備山、京都府(神山・甘南備山)の計11件である。調査の詳細は既に公表されている調査日誌『楽石雑筆』に譲るが、従来から土製模造品が多く出土していた東長田遺跡、海獣葡萄鏡などの神宝を多く所蔵している香取神宮などを除き、その多くが、峠・山・岩などに関わる場所であり、先に挙げたもの含むその後の論文において繰り返し実例として登場することになることに、改めて注目したい。なお、9年度は研究題

目に「神道考古学の組織」が添えられている。

こうした各地の実態を親しく・詳らかに調査した経験が、遺物出土例の重視から、立地・祭祀対象の重視への変化の大きな要因だと考えられる。

祭祀遺跡の発掘調査

大場の立論の多くは、現存の神社信仰と、そこから採集された祭祀遺物の存在に負っていたが、自ら発掘調査して考古学上の遺跡であることを確認した事例として静岡県下田市の洗田遺跡(大場ほか1938)と、群馬県伊勢崎市姥石(1942f)の2例がある。洗田は1927年以来の再調査である。姥石は神社精神文化研究所の主催で行われたもので、報告もその機関誌に発表されたが、組織の詳細は不明である。

総合的な論述

1937年には「原始神社の考古学的一考察」(1937a)で早くも総論的な内容がまとめられた。磐座・神籬・神奈備の実態や、崇敬対象となった理由、奉斎様式、祭祀用器物の実態などについて考古学的に検討する必要を指摘し、「磐座其他」「神奈備と三室」「古墳と神社」の3項目について古典・現存する実例を挙げている。「伊賀国南宮山麓の上代祭祀遺跡」(1939)では、敢国神社末社大石神社の旧社地にあり採掘で失われた「大石」と採集遺物報告に続けて、山(南宮山)・石(大石)・古社(敢国神社)・遺物伴出という4要素を挙げて各地の実例についてもその要素の有無を挙げた比較表を提示している。

こうした流れが「祭祀遺蹟に就いて(群馬県下発見を中心として)」(1942e)、「祭祀遺蹟に就いて」(1944)を経て、学位論文に結実していくのである。

(5) 古墳・古氏族の研究

先に述べた滋賀県日吉大社境内の古墳報告に続き、「断夫山古墳の造出に就いて」(1930)が発表される。この年の愛知県での神職講習会のエクスカージョンで踏査した断夫山古墳において、造出部から土器を採取したことと、前年の柴田常恵による群馬県保渡田八幡塚の講演をもとに、造出部を祭壇と推測したものである。

前述の「原始神社の考古学的一考察」(1937a)では「古墳と神社」の項目も挙げられており、山梨県山梨岡神社における古墳の例や、愛知県尾張平野における古墳群と神社・尾張氏との関係を論じている。

同年には「考古学上より見た神社と氏族」(1937c)も発表された。島根県玉造湯神社・忌部玉作遺跡・徳蓮城古墳と玉作氏、奈良県鏡作坐天照御魂神社・同社蔵の二神二獣鏡と鏡作部、愛知県尾張戸神社・社殿下の古墳と尾張氏、静岡県敬満神社・牧野原御小家原古墳の精巧な杏葉と秦氏、群馬県土師郷の土師神社・土師器窯・古墳と土師氏の関わりを説いた。古記録にある氏族と神社・地名・考古資料を結びつける視点は、晩年の古氏族論と基本的に変わるところはない。既に、神社局の宮地直一や太田亮らによって氏族と神社、地名の問題が論じられていたが、大場は考古資料を検討材料に加えたのである。

1941年には『國學院雑誌』の古語拾遺特集に「古語拾遺の考古学的一考察」(1941a)が掲載された。本稿は古語拾遺本文の考察ではなく、斎部氏関係の問題として、まず玉作部、続いて斎部氏の東方移住の問題を取り上げる。前者は出雲の玉作り遺跡などを取り上げ、後者は神社分布や、下田市白濱神社の御正体などをもとに論を進めている。

さらに、1943年の『神道考古学論攷』には「古墳と神社」が掲載されている。本稿はもともと「河野博士記念論集」に掲載予定だったものだが、本書が初出となった。愛知県多岐神社を対象とし、まず金石文の銘文からかつて「大塚社」と呼ばれていたことを明らかにした上で、神社は古墳を対象として発生し、後に経塚が営まれたことを論じた。さらに、類例の比較から墳墓対象の神社を、御廟信仰によるものと、氏族の祖先墓を対象とするものの2つに分け、後者の指標として古社・古墳・氏族が関連して存在することを挙げている。

(6) 祭祀遺物の考察

石製・土製の模造品や手捏土器については、既に『神社と考古学』や第2段階の諸研究で取り上げられていたが、このほかに「石製模造の馬に就いて」と「祭器」の2編がある(1930b・d)

「上代馬形遺物に就いて」(1937b)は土馬を扱ったものである。はじめに事例約40例を挙げ、形態・出土遺跡を確認し、神社・祭祀遺蹟・古墳からの出土例からこれらを「祭祀又は信仰関係品」とする。次いで馬と祭祀の関係を古典の記載をもとに論じている。

子持勾玉については、「神宮々域発見の子持勾玉と滑石製品」(1937e)と「子持勾玉私考」(1937f)および「玉依比売命神社の児玉石」(1942b)の3本の論考がある。その内容は別に検討したように、折口信夫の石に関する考察を援用し、生成する石に対する觀念の表れと解釈する一方、宮地直一にならって子持勾玉を持つ氏族の検討を行ったものである(中村 2010)。

「仮器としての三器」(1940c)は鏡・剣・玉の模造品を扱ったもので『論攷』未収録の論考である⁽³⁾。序言で、これら三器が、それぞれの本来の特質とそこから導かれた神秘的觀念の二面を有していることを指摘する。次いで「仮器の要素とその特質」において、仮器を「その器の所有する本来の性能から離れ、単にその形態を模したものとし、その特徴として「(一) 質料の変異、(二) 製作の粗笨、(三) 形状文様等の異様化」を挙げる。次いで、「仮器としての三器」の項では、各地の実例を紹介し、「仮器の用途と文献に見えた三器」で、模造の動機を「(1) 特殊な用途に充てられるため一時的に仮作する場合、(2) 現品の同一品を得難きを以て、類似の形状物質を以て模作する場合」の2つを想定し、後者の例として崇神天皇の頃、宮中に奉安していた三器のうち鏡と剣を模造し、護身用とし、原器を別に奉安させたとの記事を引く。

「古代の祭器」(1942a)は、当時の祭器の代表例として日本書紀や万葉歌をもとに土器と玉を論じたものである。

戦後の著作であるが学位論文およびその一部を抜粋した「石製模造祭器について」(1955)・「上代祭祀遺物の特質」(1957)は、これらの集大成である。その構成は2段階論法となっており、まず土器や剣・玉・鏡などが古くから祭祀に用いられたこと、聖視されたことを古文獻の記事や現在の神宝の例を紹介する。次いで、それをモデルとした模造品の仮器としての特質を論じるというものである。子持勾玉や模造品のみを扱った論考でも、その性格付けの部分は、剣・玉・鏡などの考察となっている。なお、学位論文において祭祀遺物の特質として、「伝統の尊重、清浄性の強化、形状の形式化」の3つが挙げられた。

(7) 神話・古典の考古学的研究

皇紀2600年を記念して数本の論文が書かれている。「神武天皇紀の一考察」(1940a)は「膽駒越と孔舎衛坂の御遭難」と「丹生川上の御親祭」のエピソードを取り上げ、前者は荒ぶる山の神、後者は特定の場所で特定の土を用いた土器づくりについて、古典の記事と考古学的な実例を挙げて、当時の一般的習俗であったことを論じたものである。

また、『論攷』巻末リストには無いが、同年の「信濃建国史の一考察」(1940b)では、建御名方神の諏訪鎮座神話に関連した銅剣・銅鐸類の青銅器分布、日本武尊に関連した神坂峠の問題、国造設置に関連した古墳分布などを論じている。

(8) 修験道の考古学的研究

本格的に論じられたのは『論攷』にも収録された「関東における修験道流布の考古学的考察」(1936b) 1編のみだが、相模大山、二荒山、箱根山・伊豆山、赤城山・榛名山という関東の山岳信仰の代表例を挙げて出土品を検討したものである。その結果、修法遺跡・経塚营造・池中納鏡の3種の行為を識別したが、この3区分は、塚・神宮寺を加えて歴史時代の祭祀遺跡(大場 1965a)の主要な分類項目となる。

(9) 神道考古学の多様性と祭祀遺跡研究への収斂 神道考古学の多様性と共通性

以上、戦前を中心に「神道考古学」に関する大場の論考を概観してきた。そこでは、①石器時代の信仰遺物、②石製模造品出土遺跡の考察、③神社の資料、④自然物を対象とする神社・遺跡、⑤古墳・古氏族、⑥祭祀遺物、⑦神話・古典、⑧修験道など多様なテーマが論じられていた。

こうした多様なテーマに関わらず、古典・民俗資料を立論のベースとし、実際の考古資料を解釈するという論法は、①・③を除くと共通している。また、実際の考古資料の観察・記述よりも類例紹介と解釈に重点が置かれている点も共通している。

『論攷』の編集と祭祀遺跡研究への収斂

このうち、戦後神道考古学の中核として『祭祀遺蹟』などに論文が収録されるのは、④・⑥に限られる。⑤は『考古学上から見た古氏族の研究』として、

大場最晩年の論集にまとめられたが、神道考古学の成果として明記されたものではない。

祭祀遺跡研究に収斂していく過程で重要なのが『論攷』と学位論文の前身と推察される「祭祀遺蹟に就いて」である。『論攷』は1943年に従来発表してきた関連論文22編をまとめたが藤森栄一の葦牙書房から刊行された⁽⁴⁾。「神道考古学の提唱」を改題して冒頭に、「組織」を末尾に配し、第1段階の著作の中から土偶に関する2編、第2段階からは3編、第3段階から17編をほぼ発表年代順に並べ、巻末に神社精神文化研究所の『古代学』の特集として刊行された「祭祀遺蹟地名表」(1941b)を収めている。但し、第1段階では、「石器時代宗教思想の一端」、「土偶の社会学的考察」および石棒関係の諸論考、第2段階では「南豆に於ける特殊遺跡の研究」、第3段階では、「池中の鏡」、神社宝物関係、古語拾遺、「仮器としての三器」などが収録されていない。第1段階のもので外されたものは大場自身が未熟なものと考えていたため、「南豆に於ける特殊遺跡の研究」は「南豆洗田の祭祀遺蹟」との対象の重複を避けるため、「池中の鏡」は神社宝物誌中の論考の中で唯一収録された「出羽神社発見の古鏡に就いて」との重複を避けるためと思われるが、神社宝物関係の文章の多くが収録されなかったこと、それにも関わらず神社資料を対象とした「組織」が掲載されている点に過渡的様相が窺える。

「祭祀遺蹟に就いて」(1944)の分類[資料3]は、「原始神道の考古学的考察」と学位論文「祭祀遺蹟の研究」の中間的な様相を示しているが、狭義の祭祀遺蹟が「遺蹟としても明かに独自性を認められる」とし、その具体例として、イを山・石・水・墳墓の項目に分け、ロ・ニを含めてそれぞれ具体例を紹介するなど、内容とその量配分は学位論文に近いものとなっている。また、この時点で「狭義の祭祀址」が祭祀専用空間として認識されていたことも重要である。

4. 「神道考古学」第3段階の特徴と今日的課題

以上、大場磐雄「神道考古学」の諸段階、枠組みの変化、第3段階における多様な発展の可能性と祭祀遺蹟研究への収斂について概観してきた。最後に、第3段階の諸論考に見える方法的な特徴とその今

目的な評価を試みて、本稿のまとめとしたい。

(1) 神道考古学の対象

これまで見てきたように、第3段階の前半期において大場が構想した「神道考古学」は、先史文化・古墳・氏族・古典・修験道・神社宝物など多様なテーマを包括するものであった。戦後、「考古学」自体の範囲の縮小と専門分化、文化財保護行政の確立などを背景として、新たな考古学の一分野として、祭祀遺跡・遺物研究に収斂していったわけである。

大場の没後、「神道考古学」の対象・範囲の曖昧さが指摘された(佐野 1992、坂詰 1994)。その1つの結果として、韓国竹幕洞からの石製模造品出土を契機として、東アジア的視点から祭祀行為を検討する「祭祀考古学」が提唱されたのだが(杉山 1994・1997、杉山ほか 1998)、我々が参照する「神道考古学」の定義の曖昧さの要因の1つに、本来多様な展開の可能性を秘めていたことは確認しておくべきことからである。

(2) 文献資料・民俗資料の利用・遡及法

第3段階における立論の基盤が、古典の記述および現存する神社信仰・民俗信仰であることは繰り返し指摘した通りである。前者は8世紀代から19世紀にいたるまでの記録、後者は現在の状況を定点として、同様の現象が出土遺物の時期まで遡ることを示す方法である。これを遡及法と呼んでおく。

この方法は、もともと民族学や文献学的研究によって定説化していた神社の初源形態に具体的な年代を与えるという点で画期的な意義を持っていた。また、現在の民俗事例に文献の記録を加えることで、古墳時代と現在を直接結ぶのではなく連続性を示すことができる点でも有利な方法である。

近年、笹生衛(2010・2011)や深澤太郎(2010)が述べるように、現在を起点とするのではなく、「神道」という用語の成立直後である8世紀の文献(『延喜式』や『皇太神宮儀式帳』)を起点に前後の時代の祭具を比較する方法がある。祭式もまたそこまで遡るのであれば、「祭祀の対象」という主題とは別に、具体的な行為(祭式)という主題も遡及できる可能性がある。

また、民俗・文献・考古の三位一体で類例を遡及

していくという大場の方法論は、本プロジェクトの伊豆地域の研究で展開されたように(吉田ほか 2012)、中世から現代という新しい時代の具体的な祭祀の展開を地域史に即して検討するには依然として力を発揮する。

しかしながら、遡及法は、既に失われた現象は取り扱うことができないこと、類似する現象を追いかけていくため変化・変異を捉えにくくなるという欠点がある。原理的には、類似点で遡及していくと、ルーツは限りなく広がり、古墳時代という時代の枠、日本列島という空間の枠をも超えていく。結果的に、文献や民俗は古態をよく残しているという本末転倒な解釈を生みかねない。

(3) 祭祀専用空間・祭祀専用品論

「祭祀遺跡」概念の定着

今日、大場の業績の第一に挙げられるのが、「日本の考古学界に、いままでなかった祭祀遺跡・祭祀遺物の概念を確立したこと」である(佐野 1992: 2頁、大平 2003)。それ以外の大場の所説についてはそのまま受け入れられないという意味でもあるが、その「祭祀遺跡」についても今日の状況は大場の当初の意図とはやや異なっているように思われる。

B類遺跡の増加と再度の祭祀遺跡認定方法の変更

第3段階の研究の大きな特徴は、山・岩・池など「祭祀の対象」の明らかな遺跡(「体系」のA類遺跡)を重視し、それに基づいて祭祀遺跡を認定し、分類する点にある。現存する神社・民俗の事例や文献の記述によって分類が行われ、それに該当する遺物出土が祭祀遺跡として認定されるのである。直接遺物の出土がないC類の存在はこの論法を端的に示している。

しかし、第4段階以降、A類遺跡は浜松市渭伊神社境内遺跡(天白磐座遺跡)など一部を除いて新例は知られず、変わって発見例が増加したのがB類遺跡即ち古墳時代の集落・居館・都市で発見された祭祀専用遺物を含む遺物群である。大場存命中の例としては、東京都足立区伊興遺跡、静岡県河津町姫宮遺跡などがある。大場は姫宮遺跡については近くの小山を対象とする可能性にも触れつつ、神籬を立てて神まつりをした可能性を指摘した(1958)。伊興遺跡については祭祀遺物集中地点に関してはその

位置関係から水霊を奉祀したもの想定したものの、住居出土例については個人的祭祀の存在を指摘するのみで祭祀の性格等については論じていない(1962a)。これらは基本的に居住域に併設された祭祀空間であり、A類遺跡のような隔絶した空間とは明らかに様相が異なる。

結果として、現在は祭祀遺物の出土から「祭祀関係遺跡」として幅広く捉えられている遺跡が多い(東日本埋蔵文化財研究会編 1993)。実は、これは大場の「神道考古学」第2段階と同じ構図であり、祭祀を行った場なのか、撤去した場なのかという問題も同様に発生する(乙益ほか 1983)。

祭祀専用空間あるいは祭祀遺物出土遺構だけの検討にとどまらず、居住・葬送・祭祀・生産・廃棄などを含めた、全体的な空間構造を把握し、祭祀のあり方を総合的に理解を図る方向性が求められよう。

専用空間論・専用品論の意義

そうした意味では、逆説的ながら、「住居跡や古墳と並ぶ考古学的な遺跡の分類の一角を占めるもの」として指摘された「狭義の祭祀遺跡」すなわち居住域と離れた専用空間という大場のA類遺跡は、全体の中に位置づけることによって改めて空間論的意義を帯びてくるのである。なぜなら、集落内(日常空間)での祭祀と山中・峠などの非日常空間での祭祀は、道具立てや次第が同じであっても、目的や社会的意義・効果は異なるはずであり、何よりもそれぞれ「場」に対する人々の認識という点で重要な意味を持つからである。

祭祀空間論と同様の問題は祭祀道具論にも発生する。大場自身(1964)が指摘するように、祭祀において鏡・剣・玉や土器類は別途考察が進んでいることから「神道考古学」の枠内では細かい議論がなされていない。しかし、先に確認したように模造品を論じる際に、オリジナルの聖性についても遡及法による議論を展開しており、また、祭祀において日常と同じ道具で神をまつる例のほうが多い可能性もあるので(吉田 2007)、祭祀専用品(手捏土器・模造品など)のみで祭祀を論じるのは誤りである。

一方、極端な拡大/縮小、精製/粗製などの点で区別される祭祀専用品は、日常品を含めた道具全体の中では、モノに対する認識という観点で重要な意義を持つ。どのような器物が専用品化するのか、そ

の方法としてどのような手段がとられるのかが問題となる。大場の使用した用語では「仮器」がそれにあたるが、その特徴として挙げられた「質料の変異、製作の粗笨、形状文様等の異様化」は、モノ論として重要な意味を持つ。同様に、学位論文で祭祀遺物の特質として挙げられた「伝統の尊重、清浄性の強化、形状の形式化」も同様である。

(3)「祭祀の対象」という考え方

現在の神社立地からの遡及

当初、山・岩などの祭祀対象の自然物は、古社や古墳とともに祭祀遺跡の指標となる「要素」として挙げられてきたが、その後、祭祀遺跡を論じる際の章立てとなり、学位論文によって祭祀遺跡の分類基準となり、「体系」ではさらに神奈備型・浅間型などに細分された。

この細分に関連して、1959年の「神社原始型一覧別表」という表が残されている(國學院大學伝統文化リサーチセンター編 2010: IV-1-10)⁽⁵⁾。縦軸に三輪型・富士型といった細分、横軸に古社72社名を挙げ、各社の信仰の拠り所となる要素と遺物の出土の有無に○を付与するものである(第1図)。同種のものが模造紙に拡大されたものは講義において用いられたものであろう。原案の年代は不明だが、「体系」に掲載されていない「赤城型」や、古墳を信仰起源とする「誉田型」が含まれている。いずれにせよ本資料からは「体系」に示された細分が、祭祀遺跡そのものの検討ではなく、現存する神社の信仰のあり方から導き出されたものであることが改めて理解されるのである。

大場ののち、祭祀遺跡の分類は何度か提起されるが、小野真一の『祭祀遺跡』における項目立て、大平茂(2003・2008)の『祭祀考古学の研究』における分類も、この「祭祀の対象」を重視している。しかし、都市・居館・集落などでは「水辺」を除き、祭祀対象を明確化しえないものも多い。

祭祀対象の複合

ところで、先の「神社原始型一覧別表」中の大神神社(三輪型・要石型)、赤城神社(赤城型・要石型・鏡池型)のように複数の型に○が打たれているものがある。また、1958年に大場によって境内の発掘調査が行われた静岡県熱海市多賀神社は式内白波

第1図 神社原始型一覧表（部分、國學院大學伝統文化リサーチセンター編 2010：IV-1-10）

之弥奈阿和命神社にも擬され、背後に神奈備型の向山、本殿裏には神木である樺、磐座と想定される岩と原始信仰の対象が揃っており、加えて、漂着神伝承に基づく社から海岸への神輿渡御の民俗信仰が注目された。大場は、漂着神の目印として向山や磐座を位置づけ、山・木・石・海という4大要素の揃う例として重視している（大場 1958・1960・1969）。また、筆者の故郷の相模大山は、山そのもののほか、山頂の神体石（石尊権現）と雨降木、二重滝その他各種の石・滝・湧水の祭祀対象を持つ。こうした複数の要素が抽出される例は霊山とよばれる場所にあってはむしろ一般的であり、中・近世には各種の宮曼荼羅・参詣曼荼羅に多くの聖地が描かれてきた。このような場合、山（ないし海）という広い空間と、その中に含まれる石・池（ないし岬）などはどのような関係として整理すべきだろうか。また、山を仰ぐ祭祀の場に磐座を設ける場合、「祭祀の対象」はどちらになるのだろうか。その判断基準や分類の意義は曖昧である。

祈願内容の多様性

加えて、先の大山の例でいえば、近世において雨雲を従える姿および水源地としての立地から農民は雨乞いの神として、海上の目印としての雄姿から漁民は海上安全の神として、あるいは死者の魂の赴く霊山としてそれぞれ信仰を集めていた。しかしながら、こうした複合的な信仰のあり方は、山・石・池などの画一的な分類では評価できない。遺跡の立地を考える上では「祭祀の対象」は重要であるが、それを基準として分類することの意味は再検討されるべきであろう。

2001年よりインターネットサイト「岩石祭祀学提唱地」を開設している吉川宗明は、近年その内容の一部を一書にまとめた（吉川 2011）。その大きな特徴は、大場の立石型・像石型・飯石型といった祭祀対象自然物の静的な細分ではなく、「磐座・磐境の考古学的考察」で示された石神：石そのものが信仰の対象、磐座：依代といった分類を、「機能分類」として継承し、A信仰対象・B媒体・C聖跡・D痕跡・E祭祀に至らなかったもののと4大別25細分した上で、各場所（神社・山・遺跡）の個々の岩石の

性格を解釈する点にある。同じ岩石でも時代や関わる人間によって異なる性格(分類)を想定する場合もある。この分類は現存する岩石に関わる祭礼・伝承に基づいており、伝承が既に失われた考古学的な遺跡の解釈にもそれを応用する点は大場の方法そのものである⁽⁶⁾。祭祀対象の静的分類基準ではなく、機能分類とアプローチ方法を批判的に継承した好例である。吉川の分類は、祭祀にかかわるA～Dに、直接関わらないEを加えたもので、A～D以下の細分も依代・台座・願いの転送装置・鎮めなど詳細である。これにより、岩石にまつわる様々な祭祀行為の存在を明らかになるとともに、画一的な解釈が退けられることになる。

また、第4段階における各祭祀遺跡についての大場の著作は、「祭祀の対象」を特定または推定して結論とする場合が少なくない(大場 1962a・1963、大場ほか 1963 など)。しかし、それが判明する場合でも、そこで留まることなく、谷口康浩(2008)が指摘したように祭祀の反復性・定型性にもとづく、行為のパターンを注意深く見出していくことが求められる。

(4) 自然景観・モノの人格化思考

大場は、学位論文の中で、山・石・木等の自然物(それ自体)は、従来の考古学的見地からは遺跡として認められないが、祭祀遺跡研究の立場からは当然遺跡とすべきと述べている(1970:12頁)。

大場が、人工遺構・遺物のみならず、また生態的自然環境とは別に、文化的な意味で自然景観を考古学研究に取り込んだ先駆的意義については既に指摘されているところである(山内 2000)。先に挙げた「祭祀専用空間」や「祭祀の対象」も実質的にこの自然景観の文化的認識に関わる問題である。こうした視点を発展させたものとして、小林達雄の景観論がある。小林(1996)は定住によって縄文集落において住居・集落・領域にそれぞれ「ウチ/ソト」の観念の発生を予測し、自らを定点として山や太陽などの自然環境を集落・記念物に取り込んだことを「自然の社会化」と呼んで、その文化的・社会的意義を強調した。

一方、「山を大人佩く神々の造成とし、それらに神霊の憑依を信じていたのであろう」(大場1970:

18頁)、「いずれも石自らに内在する活動力」(同:33頁)といった大場の記述や、子持勾玉の解釈における「魂の増殖」という折口信夫の「たま」論の援用からは、「初源的同一性」に関わる自然物さらには非生物の人格化思考(石井 2011)と同様の思考の存在を大場が意識していた可能性が示唆される。古典や民俗誌に通じていた大場としては当然であろうが、モノと心の関係性を問う上では重要な視点である。

本稿は文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統と知恵の実践」のサブプロジェクト「國學院の学術資産に見るモノと心」における國學院大學学術資料館所蔵の大場磐雄博士資料の研究および、同サブプロジェクト「祭祀遺跡にみるモノと心」における祭祀考古学方法論の検討の成果の一部であり、その内容は両プロジェクトスタッフとの日常的な討議に多くを負っている。

註

- (1) 全て神社誌・宝物誌である。
- (2) 戦後の再版本には収録されていない。
- (3) 本稿では、大場磐雄資料中の『論攷』用の校正刷を用いた(國學院大學伝統文化リサーチセンター編 2011:資料番号B-21)。なお、大場の年譜(大場磐雄先生記念事業会 1975)では「仮器としての土器」と誤記されている。
- (4) 「祭祀遺蹟地名表」の広告に「國學院大學教授大場磐雄氏著 神道考古学 原始神道篇」とあり、当初は同研究所からの刊行が予定されていたらしい。
- (5) 本資料は2010年度より伝統文化リサーチセンターにて常設展示している。
- (6) 吉川の著書は考古学的遺跡の解釈という点よりも、日本列島における岩石祭祀の多様なバリエーションを具体的に指摘した点が評価されよう。

引用文献

- 伊古奈比咩命神社編 1943 『伊古奈比咩命神社』
石井 匠 2011 「モノと心の先史人類学 ―「初原的同一性」と「エージェンシー」―」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第3号
伊豆権現講社本部編 1937 『国幣小社伊豆山神社誌』
石上神宮編 1930 『石上神宮宝物誌』

- 大場磐雄 1929a 「神社と考古学」『愛知県神職会々報』344
- 大場磐雄 1929b 「官幣大社日吉神社境内発見古墳調査報告」(未刊)内務省へ提出
- 大場磐雄 1930a 「断夫山古墳の造出に就いて」『考古学雑誌』第20巻第1号
- 大場磐雄 1930b 「石製模造の馬に就いて」『上代文化』第3号
- 大場磐雄 1930c 「上代祭祀址と其の遺物に就いて」『考古学雑誌』第20巻第8号
- 大場磐雄 1930-31 「原始神道の考古学的考察(一)～(三)」『神道講座』第9冊、第10冊、第12冊
- 大場磐雄 1930 「祭器」『歴史教育』5-7
- 大場磐雄 1931 「上代人の愛玉思想に就いて」『上代文化』第4・5合併号
- 大場磐雄 1932 「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告(一～四)」『神社協会雑誌』第31年第8号、同第9号、第32年第1号、同第4号
- 大場磐雄 1933 「小野神社蔵鉄鐸」『考古学雑誌』第23巻第4号
- 大場磐雄 1934 「出羽神社(羽黒神社)発見の古鏡に就いて」『羽黒山古鏡図譜』
- 大場磐雄 1935a 「神道考古学の提唱と其の組織(一)」『神社協会雑誌』第34年第1巻
- 大場磐雄 1935b 「峠神の一考察」『上代文化』第13号
- 大場磐雄 1935c 「赤城山神蹟考(其一)(其二)」『考古学雑誌』第25巻第11号、第12号
- 大場磐雄 1935d 「池中の鏡(一・二)」『歴史公論』第4巻第8号、第9号
- 大場磐雄 1936-37 「官国幣社宝物々語」『神社協会雑誌』第35年第8号、第35年第12号、第36年第1号、第36年第1号、第36年第3号・第4号
- 大場磐雄 1936a 「神道考古学の組織」『皇国時報』第615号
- 大場磐雄 1936b 「関東に於ける修験道流布の考古学的考察」『上代文化』第14号
- 大場磐雄 1937a 「原始神社の考古学的一考察」『歴史公論』第6巻第1号
- 大場磐雄 1937b 「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27巻第4号
- 大場磐雄 1937c 「考古学上より見た神社と氏族」『皇国時報』第638号、第639号
- 大場磐雄 1937d 「日本上代の巨石崇拜」『歴史公論』第6巻第8号
- 大場磐雄 1937e 「神宮々域発見の子持勾玉と滑石製品」『皇国時報』第649号
- 大場磐雄 1937f 「子持勾玉私考」『上代文化』第15号
- 大場磐雄・佐藤静雄・江藤千万樹 1938 「南豆洗田の祭祀遺蹟」『考古学雑誌』第28巻第3号
- 大場磐雄 1939 「伊賀国南宮山麓の上代祭祀遺蹟」『神社精神文化』第3輯
- 大場磐雄 1940a 「神武天皇紀の一考察」『國學院雑誌』第46巻第2号
- 大場磐雄 1940b 「信濃建国史の一考察」『信濃教育』640
- 大場磐雄 1940c 「仮器としての三器」『神社精神文化』第4輯
- 大場磐雄 1941a 「古語拾遺の考古学的一考察」『國學院雑誌』第47巻第4号
- 大場磐雄 1941b 「上代祭祀遺蹟地名表」『古代学』第1巻第2号
- 大場磐雄 1942a 「古代の祭器に就いて」『古美術』12-4
- 大場磐雄 1942b 「玉依比売命神社の児玉石(上)・(承前)」『信濃(第2次)』第17巻第5号、同第6号
- 大場磐雄 1942c 「磐座磐境等の考古学的考察」『考古学雑誌』第32巻第8号
- 大場磐雄 1942d 「大國魂神社の史料及社宝に就て」『多摩史談』第10巻第3号
- 大場磐雄 1942e 「祭祀遺蹟に就いて一群馬県下発見を中心として」『毛野』8-5
- 大場磐雄 1942f 「上野国姥石の古代祭祀遺蹟」『神社精神文化』第6輯
- 大場磐雄 1943a 「沼尾池趾と発見遺物に就いて」『史蹟名勝天然紀念物』18-10
- 大場磐雄 1943b 『神道考古学論攷』葦牙書房
- 大場磐雄 1943c 「古墳と神社—多岐神社を中心に—」『神道考古学論攷』
- 大場磐雄 1944 「祭祀遺蹟に就いて」『史蹟名勝天然紀念物』第19集第6号
- 大場磐雄 1950 「水霊信仰の考古学的考察」『本流』創刊号
- 大場磐雄 1953 「わが国に於ける石信仰—大湯環状列石解明の比較資料として」『大湯環状列石』吉川弘文館
- 大場磐雄 1955 「石製模造祭器について」『國學院雑誌』第56巻第2号
- 大場磐雄 1956 「神社と祭祀址」『日本考古学講座』第6巻
- 大場磐雄 1957 「上代祭祀遺物の特質」『國學院雑誌』第58巻第4号
- 大場磐雄 1958 「祭祀遺蹟(古代第2章第3節)」『伊東市史』
- 大場磐雄 1960 「神道考古学生立ちの記」『具体例による歴史研究法』吉川弘文館
- 大場磐雄 1962a 「祭祀遺蹟の考察」『武蔵伊興』綜芸舎
- 大場磐雄 1962b 「祭祀遺蹟」『日本考古学辞典』東京堂出版
- 大場磐雄 1962c 「神道考古学」『日本考古学辞典』東京堂出版
- 大場磐雄 1963 「新発見の祭祀遺蹟」『史迹と美術』第33巻第8号
- 大場磐雄・永峯光一・原嘉藤 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』第15巻第12号

大場磐雄 1964 「神道考古学の体系」『國體論纂』下巻 國學院大學

大場磐雄 1965a 「歴史考古学上における祭祀遺跡」『石田博士頌寿記念東洋史論叢』角川書店

大場磐雄 1965b 「伊那下神社」『伊豆南西海岸』地方史研究所

大場磐雄 1975 『考古学上から見た古氏族の研究』永井出版企画

大場磐雄先生記念事業会編 1975 『楽石大場磐雄先生略年譜並著作論文目録』

大平 茂 2003 「祭祀考古学の体系」『研究紀要』3 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

大平 茂 2008 『祭祀考古学の研究』雄山閣

乙益重隆・網干善教・坂詰秀一 1983 「座談会・宗教考古学のイメージを語る」『季刊考古学』第2号

小野真一 1982 『祭祀遺跡』ニューサイエンス社

折口信夫 1932 「剣と玉」『上代文化』第7号

鹿島神宮編 1939 『官幣大社鹿島神宮宝物図鑑』

香取神宮編 1940 『官幣大社香取神宮宝物図鑑』

神部神社・浅間神社・大歳御祖神社編 1937 『國幣小社神部・浅間・大歳御祖神社誌』

後藤守一 1927 「祭祀趾」『日本考古学』四海書房

國學院大學伝統文化リサーチセンター編 2010・2011 『大場磐雄博士資料目録Ⅱ・Ⅲ』

小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日新聞社

坂詰秀一 1994 「非創唱宗教考古学の課題—「神道考古学」—をめぐって—」『日本古代史叢考 高嶋正人先生古稀祝賀記念論文集』雄山閣出版

笹生 衛 2010 「古墳時代における祭具の再検討—千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号

笹生 衛 2011 「古代の祭りと幣帛・神饌・神庫—古墳時代の祭祀遺跡・遺物から復元する祭具と祭式—」『延喜式研究』27

佐野大和 1992 『呪術世界と考古学』続群書類従完成会

坐摩神社編 1936 『官幣中社坐摩神社誌』

柴田常恵 1924 「祭祀趾」『日本考古学』国史講習録第19巻、国史講習会

神宮徴古館編 1940 『神宮徴古館陳列品目録』

梶山林継 1994 「発行にあたって」『情報祭祀考古』創刊号

梶山林継 1997 「創刊にあたって」『祭祀考古学』創刊号

梶山林継・菅谷文則・茂木雅博 1998 「座談会 山を考古学する」『季刊考古学』第63号

谷川磐雄 1922 「石器時代宗教思想の一端（一）～（三）」『考古学雑誌』第13巻第4号、第5号、第8号

谷川磐雄 1926 「考古学上より観たる葦田神社」『神社協会雑誌』第25年第2号

谷川磐雄 1926 「土偶に関する二三の考察」『國學院雑誌』第33巻第5号

谷口康浩 2008 「総論 コードとしての祭祀・儀礼—行為の再現性と反復性—」『月刊考古学ジャーナル』No. 578

谷川磐雄 1926a 「長田神社境内出土の遺物に就きて」『神社協会雑誌』第25年第8号

谷川磐雄 1926b 「土偶の社会学的考察—日本石器時代における母権の存在—」『國學院雑誌』第32巻第9号

谷川磐雄 1927c 「神奈川県中郡大根村天神台遺跡調査」『歴史と地理』第19巻第5号

谷川磐雄 1927d 「南豆に於ける特殊遺跡の研究（上・中・下）」『中央史壇』第13巻第6号、第7号、第8号

砥鹿神社社務所編 1944 『三河国一宮砥鹿神社誌』

中村耕作 2008a 「大場磐雄の縄文時代精神文化研究—「石器時代宗教思想」研究から「縄文人の信仰儀礼」研究へ—」『祭祀考古学』第7号

中村耕作 2008b 「神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡—大場磐雄の伊豆調査—」『平成20年度フォーラム 伊豆の神仏と國學院の考古学 発表資料集』國學院大學伝統文化リサーチセンター

中村耕作 2009 「大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号

中村耕作 2010 「「古代学」としての考古学・「神道史」としての考古学—大場磐雄の子持勾玉論をめぐって—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号

中村耕作 2011 「神職講習会講義案にみる大場磐雄「神道考古学」の構想」『日本考古学史研究』第1号

箱根神社社務所編 1935 『箱根神社大系 下巻』

東日本埋蔵文化財研究会編1993 『古墳時代の祭祀 祭祀関係の遺跡と遺物』（第2回東日本埋蔵文化財研究会）

深澤太郎 2010 「メタ「神道考古学」序論—『日本書紀』と神不滅論から紐解く道慈の「神道」観—」『日本基層文化論叢』雄山閣

宮地直一 1926 「神社と考古学」『考古学講座』第1号～第3号、第5号～第8号、第10号、第12号、第15号、第17号、第20号、第24号

茂木雅博 1981 「神道考古学発達史」『神道考古学講座』第1巻 雄山閣出版

山内利秋 2000 「景観」『用語解説 現代考古学の方法と理論』2 同成社

吉川宗明 2011 『岩石を信仰していた日本人—石神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるものの研究—』遊タイム出版

吉田恵二・内川隆志・深澤太郎・中村耕作・石井匠・田中大輔 2012 「伊豆半島・諸島における祭祀考古学」『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』國學院大學伝統文化リサーチセンター